様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０６７４４

研究課題名（和文）東京都内の神社に建てられた神楽殿に関する研究

研究課題名（英文）Study on the kagura hall(kaguraden) built in shrines in Tokyo from 19th century to 20th century.

研究代表者
山崎　鯛介（Yamazaki, Taisuke）

東京工業大学・博物館・教授

研究者番号：１０３１３３３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：江戸後期には、都市部で神事としての神楽が見られたのに対し、農村部では祭事としての里神楽が既に一般的であった。常設の神楽殿は、江戸期には神楽の内容や地域に拘わらず少なかったと考えられ、明治期から大正・昭和初期にかけて広範囲に建設されるようになり、特に昭和初期の郊外でその傾向が顕著に見られた。
また、旧荏原郡を対象に江戸期と明治初期における神社数とその管理運営体制を比較すると、江戸末期の神社数は445社で明治初期の1.5倍もあり、その7割は寺院または別当寺院によって管理されていた。このうち、別当寺院の管理下にあり、独自の敷地を持っていた神社の多くは神社整理を免れ、明治期以降も存続することとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、東京の身近な神社が都市の近代化の過程でどのように地域と関わり、変化してきたかを明らかにしたものである。前半では境内施設の一つである神楽殿を分析対象とし、その建築的特徴や境内配置から、それが祭礼施設として地域に普及していく過程を明らかにした。また後半では、江戸期におけるどのようなタイプの神社が近代に地域施設としての神社になり得たかを考察し、神仏混淆の江戸期において別当寺院の管理下にありかつ独自の敷地を持っていた神社が明治初期の神社整理を免れ、明治期に地域（町村）との結びつきを強めたことを明らかにした。これらは地域施設としての神社の成立過程を明らかにした点において学術的意義が高い。

研究成果の概要（英文）：In the late Edo period, kagura as a Shinto ritual was seen in urban areas, whereas sato-kagura as a festival dance was already common in rural areas. Permanent kagura halls are thought to have been few in the Edo period, regardless of the content of kagura or the region, and were extensively constructed from the Meiji period to the Taisho and early Showa periods, with this trend being particularly pronounced in the suburbs in the early Showa period.
A comparison of the number of shrines and their management systems in the former EBARA County in the Edo period and the early Meiji period shows that there were 445 shrines in the late Edo period, 1.5 times the number in the early Meiji period, and 70% of these were managed by temples or betsu-temples. Of these, many of the shrines that were under the control of separate temples and had their own premises were spared from shrine liquidation and continued to exist after the Meiji period.

研究分野：建築史

キーワード：神社　神楽殿　近代　江戸　東京　神楽　荏原郡　境内

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日常的に見かける東京の神社のほとんどは、その由緒を江戸期に持ち、明治以降には神社をとりまく諸制度の変更や都市の近代化に影響を受けつつも、場所を大きく移動すること無くそれぞれの地域の暮らしと文化の形成に関わってきた。近代の神社建築に関する研究は、これまで主に官国幣社を中心とした国家の神社制度の形成過程や明治神宮など国家的な神社の建設事業が注目されてきた一方で、こうした地域文化との関わりの強い身近な神社に関する建築史の研究は少なく、東京の神社に関する研究としては、以下のような都市史的な観点から書かれたもの（松山）や祭礼という観点から書かれたもの（岸川）が挙げられるが、いずれも具体的な建築の特徴も含めた建築史的な考察を行ったものではない。

- 松山恵『江戸・東京の都市史–近代移行期の都市・建築・社会』（東京大学出版会、2014）
- 岸川雅範「東京奠都と神田祭–明治初年の神田祭の変遷を素描する」（『明治聖徳記念学会紀要［復刊 46 号］』2009 年 11 月）

著者はこれまで、日常的に見かける東京の神社には「江戸期からの伝統継承」と「明治期以降の近代化」の両面が混在していると考え、それが現在の都市景観においてどのようなかたちで現れているかに注目し、以下の論文にその一部をまとめた。

- 鰐淵卓・山﨑鯛介「東京市域の神社の近代における変容　–社格の制定と震災復興土地区画整理の影響–」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、pp.135-136、2015 年 9 月）

ここでは古地図を悉皆蒐集して神社敷地の接道状況を分析検討し、江戸期から道路の奥まった位置に存在していた神社境内が関東大震災後の区画整理によって接道状況が大幅に改善され、そのため特に下町を中心とした中規模の神社では本殿の側面・背面が街路に露出してしまうという、それ以前にはなかった神社景観、都市景観が生まれたことを明らかにした。

また、神社境内については、たとえば大規模神社では明治初年の神仏分離政策によって神社境内から仏教施設が撤去されたように、東京の町中の神社においても江戸期と明治以降では神社境内を構成する施設に変化があったと考え、そこで筆者らは特に東京の神社で明治以降に「里神楽」が大流行したことに着目し、以下の論文を発表した。

- 皆葉仁美・山﨑鯛介「東京都内の神社に建てられた神楽殿の数と形式」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、pp.357-358、2016 年 8 月）

ここでは、明治期以降の「神楽殿」の建設状況について調べ、東京都区部のほぼ全域にわたって神社境内に神楽殿が建設されたこと、建設時期は明治期から戦後 1980 年代までほぼ一貫して見られたことを指摘するとともに、戦前の神楽殿の建築形式について公文書附図を用いて詳しく分析し、間口二間×奥行き三間の典型的な平面形式があったこと、その配置については神楽殿が本殿から大きく離れた位置で参道と直交するように置かれ、できるだけ前面に広いスペースが確保されるような、祭事を想定したと見られる工夫があるなど、神楽殿が既に神事よりも祭礼を優先して設けられていた可能性が高いことを指摘した。

２．研究の目的

本研究の目的は、東京の身近な神社が都市の近代化の過程でどのように地域と関わり、変化してきたかを建築史・都市史的に明らかにすることである。具体的には、本研究の前半においては、神社が江戸期以来それぞれの地域で果たしていた「祭礼空間」としての役割に注目し、境内施設の一つである「神楽殿」を分析対象として考察を行った。これは、祭事としての里神楽とその舞台である神楽殿の普及には、近代において神社が地域施設としての性格を強め始

めたことが反映していると予想するためである。また、後半においては、さらに多く存在した江戸期の神社のうち、どのような神社が明治初期における大規模な神社整理を免れ、近代における地域施設としての神社になり得たかを考察した。これは明治初期の神社整理の方針において、江戸期のような寺院に依存したあり方とは異なる、新しい神社の管理運営体制が地域との関係において必要とされたと考えるためである。

３．研究の方法

まず、江戸末期から明治・大正期の東京における神社および神楽殿の建設時期・建築的特徴に関する基本的な情報を集めるため、江戸末期については『御府内備考続編神社部』（都市部）や『新編武蔵風土記稿』（農村部）といった地誌を、明治・大正期については東京都公文書館所蔵の神社関係資料（公文書）を悉皆蒐集・分析し、その時代的傾向、地理的傾向、意匠的特徴を明らかにした。なお、当初は文献調査の補足としてアンケートや現地調査を予定していたが、初年度にその一部を実施した結果、有益な情報の収集に限界が見られたため中止した。それに代わり、江戸期から明治期への転換期における神社管轄の実態を把握するため、地域を神社数の最も多い旧荏原群に限定し、江戸期の地誌「新編武蔵風土記稿」を精読し、江戸期の東京（荏原群に限定）における神社数や管理・運営体制、境内の様子を明らかにすることに努めた。

４．研究成果

前半の成果は、主に江戸後期から昭和戦前期までの現在の東京を範囲とした地域の神社で行われた神楽の内容、神楽殿の数と分布の変化、およびその建築的特徴について明らかにした。

まず、江戸後期における神楽の内容については、都市部と農村部で顕著な違いが見られ、都市部では神事としての神楽が御府内全域で行われていたのに対し、農村部では村民や百姓が主体の「神楽」（祭事としての里神楽の可能性）が最も多く（全て荏原郡）行われていた。次に、常設の神楽殿の有無については都市部で43社、農村部で20社に確認できたが、前述の神楽の実施が確認できた神社について見ると、都市部で行われた神事としての神楽も、農村部で行われた村民や百姓が主体の神楽も、そのほとんどが常設の神楽殿を用いずに行われていた。

明治から昭和初期について、東京都公文書館所蔵の神社関係資料を用いて現在の23区に相当する地域の神社を対象に神楽殿の有無および営繕（新築・修理など）の実態を調査した結果、常設の神楽殿は、江戸後期の分布の傾向を引き継ぎながら、数は明治初期から大正中期にかけてほぼ一定のペースで増え続け、そして関東大震災後の大正後期から昭和戦前期にかけては大田区、世田谷区、板橋区、北区などの郊外地域で急増していたことがわかった。

以上より、祭事としての神楽は江戸期において既に農村部で一般的であった可能性が高いこと、江戸期には神楽の内容や地域に拘わらず常設の神楽殿は少なく、仮設的なものが多かった可能性が高いこと、明治期から大正・昭和初期にかけて、常設の神楽殿が建設される地域が広がっていったこと、特に関東大震災後に人口増加が見られた郊外において、その傾向が顕著に見られることが明らかになった。

後半は、明治時代の旧荏原郡（品川区、大田区、目黒区、世田谷区）に相当する地域を対象に、近代以前の地域における神社のあり方、特にその管理運営体制の実態と特徴を明らかにした。その結果、江戸末期のこの地域には445の神社が存在し、明治初期の神社明細帳に記載された神社数（284）の1.5倍以上の神社が存在したこと、その7割は寺院または別当寺院によって管

理されていたこと、明治期になって廃止された神社の8割は、江戸期に寺院境内に存在し、あるいは独自の敷地を持たない神社であったこと、地域別（明治初期の90町村、江戸期の大字単位）で見ると神社数の多寡には地域差があるが、それを管理する別当寺院の数には地域差が少なかったことがわかった。要約すると、江戸期以前に創立し、明治初期の神社整理を乗り越えて現在も存在しているこの地域の神社には、江戸期において別当寺院の管理下にあった独自の敷地を持つ神社が多く含まれていることがわかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 皆葉仁美、山﨑鯛介
２．発表標題 江戸後期の地誌に記された神楽の内容とその舞台
３．学会等名 日本建築学会大会学術講演（東北）
４．発表年 2018年

１．発表者名 尼崎大暉、木津直人、山﨑鯛介
２．発表標題 江戸末期から明治初期の東京府荏原郡における神社の管掌者の転換とその影響
３．学会等名 日本建築学会大会学術講演（近畿）
４．発表年 2023年

１．発表者名 尼崎大暉、山﨑鯛介
２．発表標題 明治末期の東京府荏原郡における無格社の大量合祀の実態
３．学会等名 日本建築学会大会学術講演（北海道）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関